



マイ・ガーデニング

人生は食と花がモットー!

花の好きな私は北海道育ち、雪の少ない古河に移り住んで早くも20数年が過ぎました。



ガーデニングと書いたその庭は大石・小石がゴロゴロでした。

その庭をコンポスターで堆肥土づくり、その土を利用して今では春夏秋冬きれいに咲く花々と四季の野菜づくりを楽しんでいます。3個のコンポスターはフル回転、

そのおかげで花はよく育ち色鮮やかに咲き、野菜はとともおいしいです。生ごみ堆肥のあなたは偉い・・と感謝します。でも北国で母の咲かす花の色には負けず。寒さの厳しい所だけにとても色が鮮やかなのです。



中田町の三上京子さん(62歳)

私たち夫婦は、自然のガーデニングも好きで、春の新緑、秋の紅葉と山の魅力に取りつかれてはいますが、これからも生ごみ資源を再利用しながら「人生は食と花」をモットーに、花と野菜を育てていきます。

さわりた~い!

わが家の「みこと」は現在8か月です。毎日大きな声で笑ったり、泣いたり、お話!してくれたりします。最近、はいはいが上手になり、猫を追いかけることに夢中です。

見るもの全てに興味津々のみことは、生きた「カニさん」だってへっちゃらです。里帰り先では、トゲトゲいっぱいのカニの甲羅をバンバンと叩いて感触を楽しんでいました。見てるまわりの方がハラハラしてしまいます。そんな彼女と一緒に写っているのは、年の差77歳のひいおじいさんです。体重が8

以上あるひ孫を片手でだっこするほど丈夫な人です。きっと、みことの元気いっぱいなところは、ひいおじいさんに似たのでしょね。

みことの笑顔が大好きです。パパとママは、これから先もずっとあなたの微笑みを守っていきます。



KOGA
万華鏡

杖の不思議な力

古河藩領の江戸時代の地誌『古河志』をひもとくと、「宝曆十二年の事かとよ、何方ともなく旅僧の来て、此水は名水なり、病ある者浴するならば立所に其病癒ゆべし」といひて去り、行方知らずと也」という記述があります。



総和町下辺見「思案橋」(昭和6年)

いまでいう総和町下辺見思案橋のあたりに伝わる話です。いまからおよそ240年前、どこからか旅の僧侶がやってきて、この水は浴びると薬効があると、言っどこかへ去っていったというのです。続けて記すところによれば、誰言うことなく、かの旅の僧侶は弘法大師であると。そして、これを聞きつけて、遠方からもこの水を求めて訪れるものが絶えず、昼夜を問わず念仏を唱え、引きも切らなかつたと言います。当時江戸の随筆では「下総古河の弘法水の靈験」として広く知られた話です。

~下総古河の弘法水~

このような弘法大師ゆかりの靈験あらたかな水の話は各地にあり、決して珍しいわけでもなく、全国に1000以上もあるのです。その多くは杖で地面を突いたら水が吹き出たとされるものです。古河の弘法水の話も別の記録によれば、「此水は昔、弘法大師が鑿つ所」とあり、棒のようなものでついたと伝えられていました。

そもそも杖というものは、神仏のよりしるとしての象徴でした。杖がある場所に神仏が降臨していると考えられていたのです。それがのちに、神仏や尊い人々の持ち物となっていたのでした。立てた杖が根付いて木になる話や、水がわいて出てくるなどという話は、杖そのものに不思議な力を感じていた人々の豊かな想像力のたまものなのでしょう。わたしたちがどこへ行こうか迷ったとき、倒れた杖の方角をたよりにしてしまつのも無理はありません。

古河歴史博物館学芸員 立石尚之